

元教員である浅野社長に、ますます興味がわいてきた。浅野社長は、大学を卒業し、小・中学校の体育教師となり、順風満帆な人生を送っていた。だが、長年父を支えてきた母が病に倒れたことをきっかけに浅野燃糸に入社する。1995年、二代目社長に就任した。27歳で教員を辞め35歳になっていた。

浅野燃糸は、多くの取引先をもち、地元でも名の知れた企業として成長してきた。就任当時は、経営も順調だったが、2000年代に入ると、安価な中国製糸が流通し、燃糸業界は衰退の一途を辿る。

決して諦めない気持ちで、幾度かの会社の危機を乗り越え、双葉町への新工場建設を決める。「被災地に人が帰ってくるためには、仕事が必要です。働き、稼ぎ、暮らす、その拠点となることを願って、双葉町への新工場建設を進めています。東日本大震災から11年。ようやく始まった帰還計画に貢献し、双葉町復興のシンボルになれたらと願っています」そう語る表情はにこやかだが、瞳の奥にはどこかすごみがある。

それにしても、岐阜の会社の方が、何故に福島県なのかと疑問に思っていた。「青春時代を過ごした福島には、深い思い入れがあります。一方で、東日本震災当時には、何もできなかったという自責の念がずっとありました」

青春時代を過ごした福島。調べてみると、浅野社長は、得意だった体育の教師になるという夢を叶えようと、専門性の高い体育教員養成課程のある福島大学教育学部に進学していた。25年以上の歳月を経て、「かけがえのない青春の日々だった」と振り返る福島と再びつながった縁に、運命のようなものを感じているという。

2019年7月に初めて双葉町を訪問し、日が沈んでも明かりがとまらない町並みを見た浅野社長は、この家や町は、人々が帰ってくるのを待っていると感じたという。そして、今こそ思い出の地に何か恩返しをしようと双葉町への進出を決意した。

「町を案内してくれた双葉町長たちも、一時は心が折れそうになったそうです。でも当時の復興大臣に『ひどいことがあったら、より良くして立ち上がる。それが日本のDNAだ』と言われ、奮起した。こういう思いを持った人たちと、大きな仕事をする機会は、きっと一生に一度です。やらずに後悔したくないし、失敗しても名は残る」そう浅野社長は語っている。

双葉町に行ってみるとわかるが、広大な土地に、「東日本大震災・原子力災害伝承館」と「双葉町産業交流センター」が並び、少し離れたところに「スーパーゼロミル」がある。まわりに何もないためか、ひときわ目を引く。まさに復興のシンボリック的存在となっている。

浅野社長と浅野燃糸株式会社の歴史を知ると、ベースに人の心があることがよくわかる。3月になったら、もう一度行ってみようと思う。